国際研究論叢　34（3）：89 ～ 104, 2021

音楽リズムの表現方法に関する一考察
―親子プログラム“わくわくランド”における実践を通して―

福　井　真裕子[*1]　　光　本　諭　史[*2]

A Study on Expressive Mode in Music Rhythm:
― Through practice in the parent-child program, Wakuwaku Land ―

Mayuko Fukui[*1]　　Satoshi Mitsumoto[*2]

Abstract

This paper reports on the practical research program, “Parent-Child Contact Concert,” conducted as an event in the parent-child program “Wakuwaku Land” sponsored by the Department of Child Education and Welfare, Osaka International College. In this practical research program, within the framework of “concert,” we tried to examine from a musical perspective whether or not the participants themselves could experience and share the music with the performers, especially its rhythm, not just passively listening to the music during the concert. Furthermore, we explored the significance of participatory concerts and the effect they have on the participants by conducing questionnaires and observing the participants' behaviors during the concert.

キーワード

ふれあいコンサート　音楽の体感　リズムの身体表現

１．序文・実践目的

本稿は、大阪国際大学短期大学部　幼児保育学科で主催した親子プログラム「わくわくランド」において実施した「親子でふれあいコンサート」の実践研究について報告するものである。このプログラムにおいて「コンサート」という枠組みの中で、演奏される音楽が参加者にとり受動的に聴くものとなるにとどまらず、自らも音楽、とりわけそのリズムを体感し、また演奏者と共有できるものとなり得るよう、音楽的見地より研究し、実践し

＊１　ふくい　まゆこ：大阪国際大学短期大学部准教授〈2020. 12. 2 受理〉
＊２　みつもと　さとし：大阪国際大学短期大学部助教

た。さらにコンサートにおける参加者、ならびに参加学生の様子とアンケート調査により、参加型コンサートの意義、および参加者にもたらす効果について考察した。

近年、親子参加型の音楽コンサートが頻繁に実施されている。子どもの発達段階において「音楽を生で聴く」という体験は、平成29年改訂された幼稚園教育要領の表現領域における内容の取扱いとして掲げられている「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること」に他ならない。内容としてはオーケストラによる演奏、歌手により歌われる童謡やアニメ曲により構成されたコンサートなど多彩であるが、そのプログラムの中で来聴者が演奏者と共に歌ったり、リズムを取ったりする企画がよく組み込まれている。さらに、楽器に触れて音を出したり、指揮者として演奏に対しタクトを振ったりする体験が盛り込まれているものもある。

コンサートの形式としては、みやざき美栄・高橋恵理（2019）[1)]が「鑑賞型・参加型・視聴覚融合型」の3種類に分類しているが、上記企画内容はその中でも「参加型」にあたる。更に「視聴覚融合型」としては、武田佳美・福井真裕子が企画・実践した、生演奏・朗読・画像をコラボレートさせたコンサート「Funtasia concert」（2015）が挙げられる。

このように来聴者が演奏に何らかの形で参加することにより、上記、表現領域内容の目的を達成する一助になると考え、コンサートを企画するにあたり、参加型を意識したプログラムを検討することとした。とりわけ今回のプログラムでは、演奏される曲のもつリズム・拍子を参加者へ伝えることに着目した。楽譜に頼らず、音楽を感覚的にとらえる子どもにとって、音楽のもつリズムや拍子を体感することでその音楽への興味を深め、また親しみをもつことに繋がると期待したからである。

２．研究方法

（１）わくわくランドについて

大阪国際大学短期大学部　幼児保育学科が、その専門性を生かし、保育者を目指す学生と短期大学部教員が一緒になって、親子での造形遊び、運動遊び、保護者向け子育て講座、また学生が主体となって活動する行事等を実施し、大学内で親子のつどいの場を提供するイベントである。なお、このイベントには学生も、幼児教育演習Ⅰ・Ⅱ、保育・教職実践演習の一環として、発表、当日の手伝い、事前準備、チラシ作成・配布などを行う。学科では2017年度より毎年、各4～5回にわたり実施している。

今回の「親子でふれあいコンサート」は2019年度に実施されたプログラムの第4回目として開催した。

（２）プログラム企画・構成

コンサートプログラムを企画するにあたり、上記「実践目的」に沿った内容として鑑賞型に加え、参加型の内容を盛り込むことを検討した。その具体的方法として、参加親子がふれあいながら身体でリズムを感じたり、いろいろな楽器を鳴らしたりしながら、演奏者

側とともに音楽を創ることをコンセプトとした。詳細を以下に記す。
企画名：第4回わくわくランド「親子でふれあいコンサート」
実施日時：2019年12月14日　10時～11時
開催場所：大阪国際大和田幼稚園　フォレストホール
対象者：大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部近隣在住の幼児、小学生とその保護者
企画・実践：大阪国際大学短期大学部　教員2名　学生9名
プログラム構成：オープニング　そりすべり（吹奏楽部による演奏）
第1部　あわてんぼうのサンタクロース
/We wish you a Merry Christmas
第2部　金平糖のおどり / トレパーク / 花のワルツ

（3）選択曲について

このコンサートを実施した12月14日という時期を考慮し、クリスマスや冬にちなんだ楽曲、更にその中でも参加者が音楽に合わせて身体活動できる曲を検討した結果、以下の6曲が選択された。各曲について、その楽曲解説・活動内容の概要、ならびに期待できる参加者への効果を以下に述べる。

そりすべり
ルロイ・アンダーソン作曲。

クリスマスの代表曲であるこの曲は、複合3部形式による作品であり、管弦楽編成が主流となっている。曲の冒頭から終始スレイベルが鳴り続け、曲の雰囲気を特徴づける。再現部では主題がジャズ風に変奏される。鈴の音や、馬の蹄（ひづめ）の音、馬をたたくムチの音、馬のいななきなどが打楽器やトランペットの特殊奏法により表現されている。このコンサートでは、楽曲を吹奏楽編成で演奏することにより、これら楽器の音色を奏でることで参加者をコンサートに誘い、この後のプログラムに積極的に参加できるよう、オープニング曲として選択した。

あわてんぼうのサンタクロース
吉岡治作詞、小林亞星作曲。

この曲の1番から5番までの歌詞を続けて見ると、歌詞に出てくるサンタクロースの一連の行動がストーリーになっており、各歌詞にその様子が描写されているとともに「リンリンリン、ドンドンドン、チャチャチャ、シャララン」といった擬音が使われている。

そこでこれら歌詞の中のサンタクロースが取った行動を解説しながら参加者とともに歌い、かつ擬音部分のリズムを小物楽器で鳴らしたり、身体でリズムを取ったりすることで、参加者は歌詞の中のサンタクロースの様子をイメージしながら曲のリズムを体感できると考え、この曲を選択するに至った。

We wish you a merry Christmas

イギリス民謡。クリスマスと新年を祝う歌詞で、ABA の 3 部形式から成る 3 拍子の曲である。A、B 各異なる曲調に合わせた 3 拍子の動きをすることにより、3 拍子感と曲調を同時に体感できることを期待した。また、3 拍子系の曲は幼少期に子どもが耳にする曲の割合としては 2 拍子系の曲に比べ希少であることもふまえ、選択するに至った。

演奏会用組曲「くるみ割人形 op.71a」

この作品は P. チャイコフスキー作曲のバレエ音楽「くるみ割り人形」の中から作曲家自身により 8 曲選択され、演奏会用の組曲としてまとめられたものである。

今日のコンサートでは 1 曲ずつ単独で演奏されることも多く、また映画「ファンタジア」ではこの曲に合わせたアニメーションがウォルト・ディズニーにより手掛けられている。本コンサートでは、ピアノ用に編曲された楽譜を基本とし、それより原曲のオーケストラ版に近づけるよう編曲を加えた上で、ピアノ、グロッケン、太鼓を用いて演奏した。

この曲は元々バレエ音楽として作曲されているため、各楽曲の旋律やリズムはステップを踏んだり、飛んだりする動きに適しているといえよう。そのため、本コンサートでも参加者が感じた楽曲の旋律やリズムを身体の動きとして表現しやすい曲に成り得ると考え、選択するに至った。更に、8 曲からなる組曲のうち、参加者にとり特に旋律やリズムがわかりやすく、なおかつ身体表現しやすい曲として「金平糖の踊り」「トレパーク」「花のワルツ」の 3 曲をコンサートで演奏することとした。

3．楽曲分析に基づく身体表現との結びつき

（1）身体活動の概要

上述の通り、このコンサートでは演奏に合わせた身体表現活動を参加者に求めた。それらの動きは企画者があらかじめ決め、参加者へ説明、練習を経て実践した。

コンサートで実施した演奏曲ごとの参加者の動き、および身体活動の概要については表 1 のとおりである。

表１　コンサートプログラム構成と参加者の動き・身体表現活動

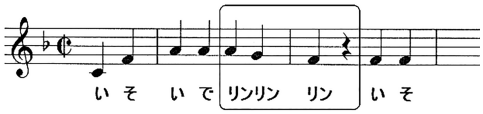
演奏曲	参加者の動き
第１部 そりすべり	 演奏を聴く
あわてんぼうのサンタクロース １番～5 番 １番「リンリンリン」部分 ２番「ドンドンドン」 ３番「チャチャチャ」 ４番「シャララン」 ５番「リンリンリン」「チャチャチャ」「ドンシャララン」	 一緒に歌う スズをリズム通り縦に振る 足で床を鳴らす ペアで互いに手を合わせる スズを連続して横に振る 各擬音 1～4 番までの動きを続けて行う
We wish you a Merry Christmas 曲全体 １小節目～8 小節目 9 小節目～16 小節目	 ３拍子のリズムを身体で表現する 曲に合わせて手拍子する 親子向かい合わせになり「ひざ・手合わせ・手合わせ」を順に行う 手をとりながら左右に揺れる
休	憩
第２部　組曲「くるみ割り人形」より 金平糖のおどり 曲全体 譜例 3-②	 親が子を足に乗せて歩くリズムに合わせて歩く 親子で手を繋ぎ回る
トレパーク 譜例 4-① 譜例 4-② 譜例 4-③	 fp の部分に合わせてジャンプする crescendo に合わせてその場で駆け足をする 学生が２人組みで手を繋ぎトンネルを作りその間を駆け足でくぐっていく stringendo から最後の音に向かって徐々にかけ足を速くし、最後のアクセントで大きくジャンプする
花のワルツ 譜例 5-① 譜例 5-② 譜例 5-③ 譜例 5-④ 譜例 5-⑤	 親子で手をとりながら左右に揺れる ３連符で軽くジャンプする 鳥のようにはばたく p でしゃがむ sfz で大きくジャンプし、最後の音で好きなポーズを決める

（2）身体表現による参加者への効果

これらの動きを作るにあたり、各楽曲のもつ拍子・リズム、加えてアゴーギク[2)]や旋律を身体で感じながら表現し得る動きとして検討した。それらを元に作成した動き、それに伴う参加者への効果、更にコンサート当日の参加者の様子から考察できることを楽曲ごとに以下に記す。

あわてんぼうのサンタクロース

上述の擬音部分のリズムは共通して［♩♩♩𝄾］というリズムパターンであり（譜例1-①）このリズムを打つ方法として取り入れた、手首を縦に3回振ってスズを鳴らす動作や、手をたたいたり足を踏み鳴らしたりする動きは、低年齢の子どもにも容易にできると考えた。

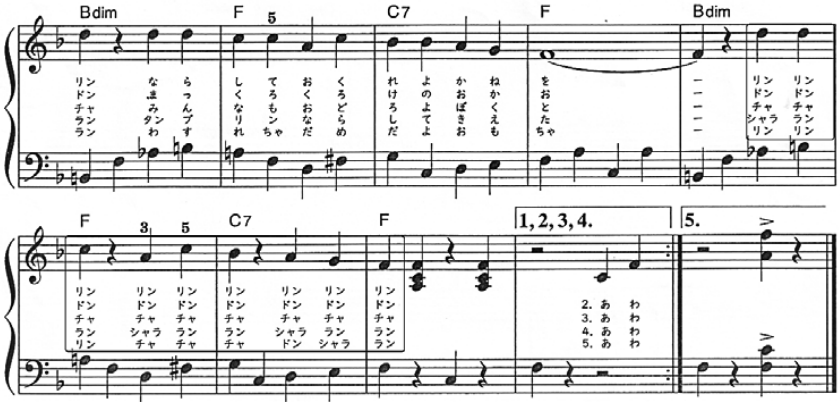


譜例 1–①　あわてんぼうのサンタクロース

更に25～28小節目にかけてこのリズムパターンが連続して3回出てくるが（譜例1-②枠線部分）5番の歌詞は各パターン異なる歌詞に合わせ、連続して異なる動きを行うことで動作が複雑となり、変化のある動きをも取り入れることができた。

当日の参加者の様子を見ると、スズを手に譜例1-①のリズムを、腕を縦に振って鳴らすことは、その歌詞とも合致しており、低年齢の子どもにも容易にできる自然な動きであったと考えられる。1番でこのリズムを何度も打つことにより、このリズムが体感できたと考えると、続く2番～5番の同じ擬音部分（譜例1-②枠線部分）も同様のリズムで打つため、打つ部位を変化させても参加者は容易に反応し、動くことができたと考える。

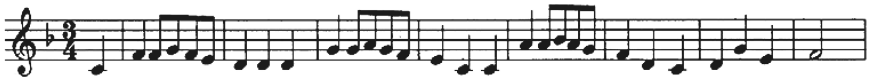
このように楽曲に合わせて身体を動かせる活動をする際、その場で練習する時間も十分確保できないことから、参加者全員が年齢に影響されることなく容易にできる動きを取り入れることで、楽しんでその楽曲を聴きながらリズムを体感できる余裕が生まれると考えられる。



譜例 1-②　あわてんぼうのサンタクロース

We wish you a Merry Christmas

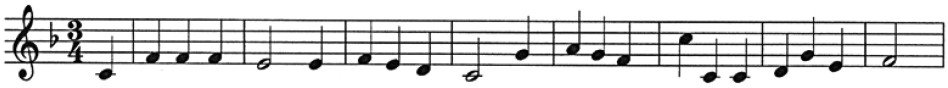
一貫して３拍子を身体で感じる動作を検討した。３拍子の１･２･３拍目をそれぞれ［強・弱・弱］と感じることで３拍子と認識できることから、楽曲の１～８小節目については１拍目を打つ場所と２･３拍目を打つ場所を変えた３拍のリズムパターン［膝・手合わせ・手合わせ］を作成した。（譜例 2-①）



譜例 2-①　We wish you a Merry Christmas

手合わせを親子で実践することにより、３拍子を身体で体得すると同時にコミュニケーションやスキンシップも計ることができたと考える。

更に、９小節目～16 小節目については曲調が滑らかになるので、３拍子に合わせて横に揺れる動きを取り入れ、曲の滑らかなレガートを身体で感じることを試みた。（譜例 2-②）実際、低年齢の子どもであっても親と手をつなぎ、一緒に横に揺れることができ、３拍子のリズムを体感できたと考えられる。

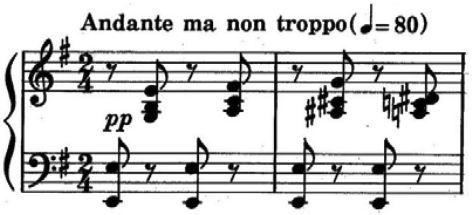


譜例 2-②　We wish you a Merry Christmas

金平糖のおどり

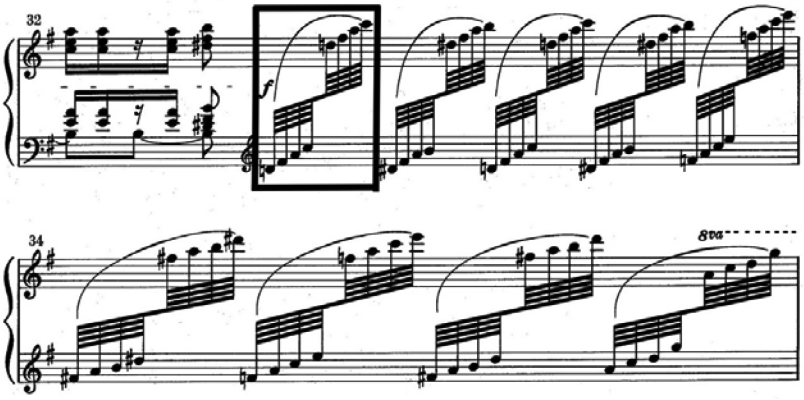
この曲は Andante ma non troppo（歩くような速さで、はなはだしくなく）という速度

表示と、曲全体を刻む８分音符のリズムを「親が子どもを自らの足に乗せて一歩ずつ歩く」という動作により表現した。（譜例 3-①）演奏に際してはピアノに加え、原曲にも用いられているグロッケンを使用し、この曲の神秘的な曲調を出した。その曲調と、２拍子を体感するために取り入れた「歩く」動きを親が子どもを足に乗せることで、子どもも親と同じ歩幅で２拍子感を体感できたと考えられる。



譜例 3-①　金平糖のおどり

更に 32 小節～ 36 小節目にかけて演奏される細かい分散和音の部分については、親子で手を取り合って回転する動きで表現した。（譜例 3-②）この音型はスラーにより一括りにされている低音から高音に向かって奏される旋律（譜例 3-②枠線部分）を「弧を描く連続した動き」として捉え、実際にはそれを「回転する動き」として表現することを試みた。曲の冒頭部分は２拍子を感じながらゆっくりステップを踏む動きをすることに対し、この部分は拍感がなく旋律も滑らかであることから、動きを変化させることにより、冒頭部分との曲調の違いを体感できたと考えられる。

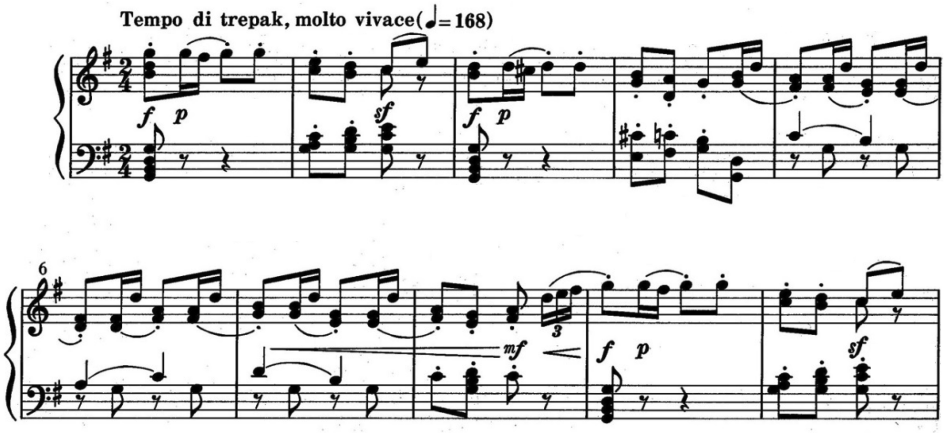


譜例 3-②　金平糖のおどり

トレパーク

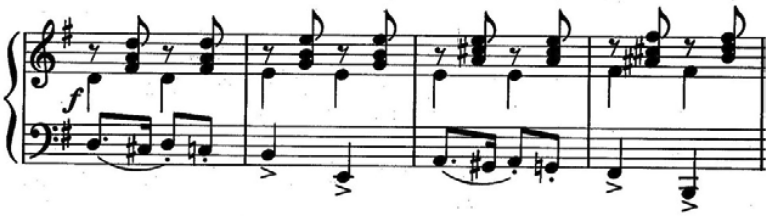
曲の冒頭、ｆ（強く）で演奏するよう求められている１拍目の音を、ジャンプすることでその強さ、激しさを表現した。その後、７小節目に出てくる crescendo（だんだん大き

く）部分はリズムパターン「♪♬」の繰り返しを表現する動きとして、その場で駆け足し、旋律が迫ってくる様子を表現した。（譜例 4-①）



譜例 4-①　トレパーク

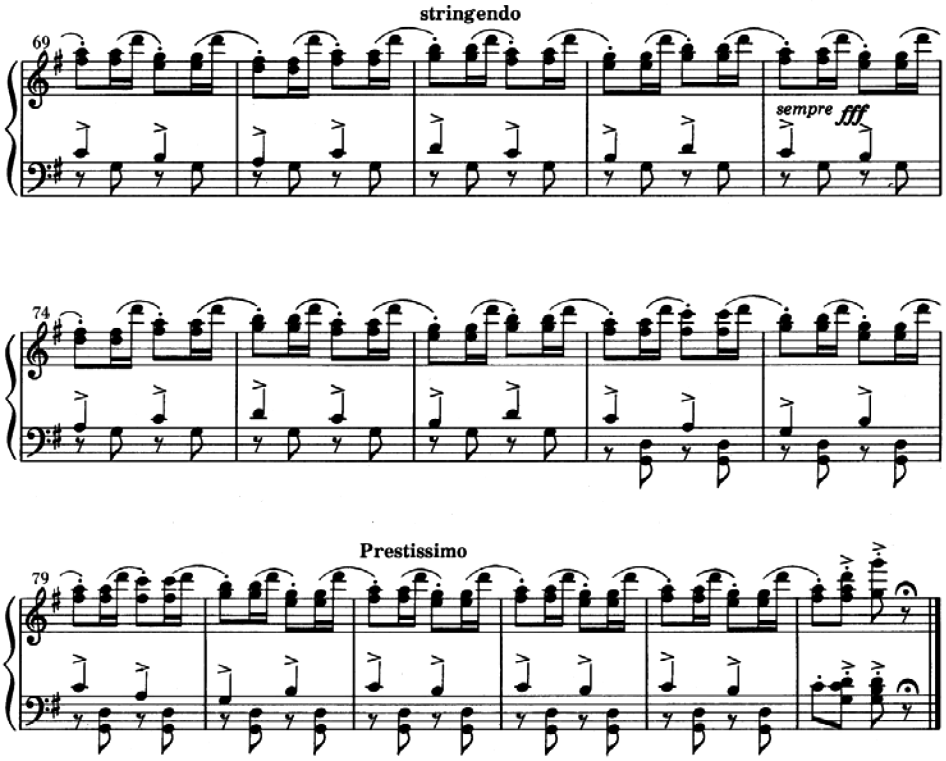
続く（譜例 4-②）の部分では、冒頭部分と比べ曲調が変化し展開される。そのため、駆け足で学生が作ったアーチの下をくぐることで、駆け足の動きにも変化を与えた。それにより、曲調の変化を感じることができたと考えられる。



譜例 4-②　トレパーク

また、stringendo（だんだん速く）の表記がある曲の最後 14 小節にかけて、速くなる曲の速度に合わせて駆け足も速くし、アクセントのある最後の音に向かってエネルギーを蓄えて最後の音でジャンプする動きを取り入れた。（譜例 4-③）

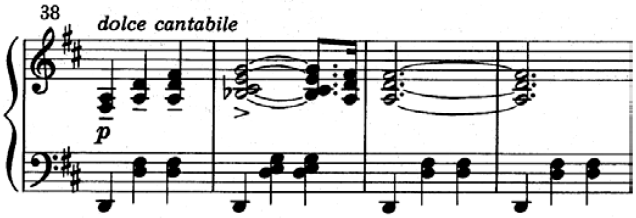
この曲の、一貫してテンポの速いエネルギッシュな曲調を体感する動きとして、飛び上がる動きや駆け足を取り入れた。飛び上がったり、走る動きを取り入れることで音楽の持つ跳躍感や力強さを表現でき、それらを体感できたと考えられる。



譜例 4-③　トレパーク

花のワルツ

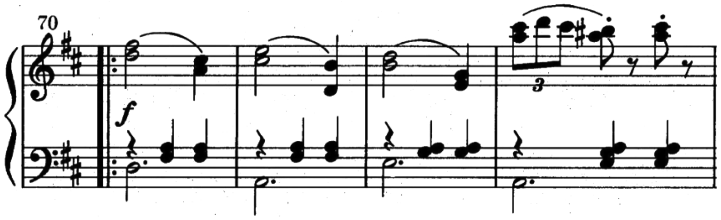
３拍子のワルツのリズムを体感し、表現する方法として、譜例 5-①より親子で向かいあって手を取り、リズムに合わせて左右に揺れる動きを取り入れた。実際のゆれ方として３拍分で一方向に揺れ、次の３拍で逆の方向に揺れるという動きを取り入れたことで、３拍子の拍それぞれ１，２，３とカウントするのではなく、３拍をひとまとまりとして感じることができたと考えられる。



譜例 5-①　花のワルツ

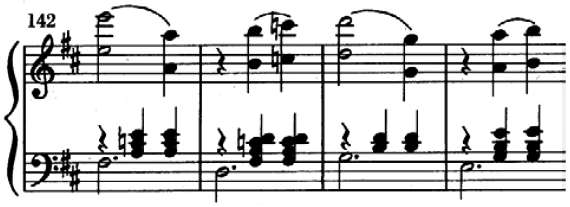
更に3連符が出てくる部分はその場でジャンプすることで装飾音の軽さや繊細さを表現した。（譜例5-②）この部分は「3小節＋三連符」というリズムパターンが繰り返し演奏され、それに合わせた動きとして「左揺れ・右揺れ・左揺れ・ジャンプ」としたことにより、まとまったリズムパターンとして身体で覚えられ、そのパターンが繰り返されることにより旋律も同時に覚えやすくなったと考えられる。

これまでの演奏部分で、当日は親子で手を取り、揺れるのみでなく、自主的に子どもを抱き上げて左右に揺れる動きをする親が多く見られた。広いスペースゆえ出来た動きであり、子どもにとっては全身で3拍子のリズムを感じることができたといえよう。



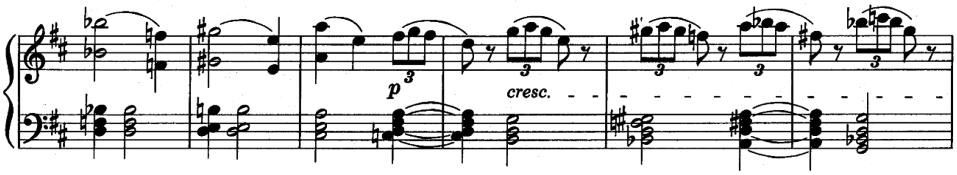
譜例5-②　花のワルツ

譜例5-③の部分では曲調が変わり、穏やかになることから、両腕を羽のように広げ、ゆっくりと鳥が羽ばたくようなイメージを持ち、曲に合わせて上下にゆっくりと動かすことで曲の緩やかさを表現した。同じ3拍子でもこの部分の旋律は主に2分音符と4分音符から成る滑らかな曲調であるため、曲の前半部分と比較しても旋律の動きが緩やかであることを「ゆっくりとはばたく」ことをイメージした身体の動きで表現することができたと考えられる。



譜例5-③　花のワルツ

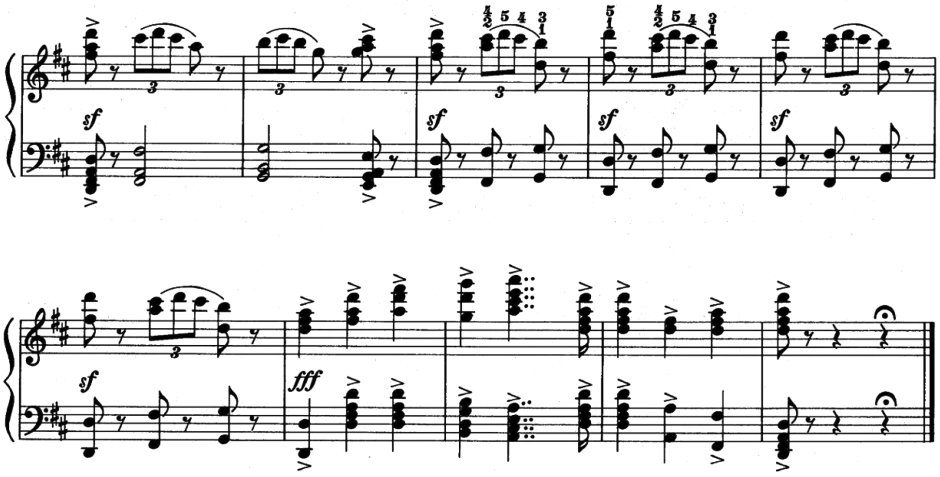
また譜例5-④に記載されている「p（弱く）」を表現する動きとして、その場でしゃがみこみ、小さくなる動きを取り入れた。



譜例 5-④　花のワルツ

更に譜例 5-⑤に示すフィナーレ部分の最後の音では好きなポーズを取り、静止することで、曲の終了とした。

このように音の強弱を自らの身体の大きさで表現することは、目に見える大きさの違いにより、大きい＝強い音、小さい＝弱い音として認識され、それらは楽器や声で音の強弱を表現するよりも単純であり、低年齢の幼児にも容易に表現できたと考えられる。



譜例 5-⑤　花のワルツ

4．来場者アンケート結果より

コンサート当日は大人、子ども合わせて合計 71 名の参加があった。その中で大学の近隣地域より親子で参加した大人 23 名に対し、コンサート終了後にアンケート調査を行い、そのうち 17 名より回答を得られた。質問項目のうち「遊びに参加して楽しかったですか」という質問に対し、16 名が「楽しかった」と回答し 1 名が「ふつう」と回答した。

更に各回答の理由を自由記述してもらった結果「ふつう」であった理由として、「少し恥ずかしかった」と記述されていた。

また「楽しかった」と回答した参加者の理由は以下の通りである。内容別に［踊る・動くことについて］［実践の感想］［音楽・楽器について］の 3 項目に分類した。

［踊る・動くことについて］
・いっぱい踊った。
・音楽に合わせて身体を動かせて楽しめました！
・リズムに合わせて身体を動かせたりできたのもよかったです。
・たくさん踊れて演奏もでき楽しかったです。
・スズやダンスなど楽しかった。
・子どもが自由に踊れてよかったです。
・歌を聴くだけでなく、一緒に踊ったりする所が楽しかったです。
［実践の感想］
・子どもたちが「楽しかった」と喜んでいました。
・リズムにのって楽しそうに子どもが遊んでいた。
・親子一緒にリズム遊びをするとかあまり日常ではないので良い体験でした。
・少し恥ずかしかった。
［音楽・楽器について］
・子どもも親も一緒に参加できて音楽に触れることができて楽しかったです。
・季節の音楽にふれる事ができてとっても貴重な時間を過ごせました。ありがとうございました。
・音楽が楽しかった。
・近くに楽器を感じれてよかった。
・演奏もたくさんの楽器が聞けてよかったです。
・身近な曲を生演奏で聴けてよかった。

この結果より、参加者にとって実践プログラムが楽しいものであり、親子で身体を自由に動かす機会になり得たことがわかる。単に音楽を聴くにとどまらず、身体全体で生演奏の音楽を感じながら身体を動かすことが「楽しい」という結果に繋がっているものと考える。

更に、楽しかった理由として「リズムに合わせて身体を動かすことができた」「音楽に合わせて身体を動かすことができた」ことが挙げられていることから、プログラムで実践した動きは音楽に合った自然な動きであり、なおかつ容易にその場で習得できたと推測できる。さらに「子どもが自由に踊れた」と記されていることより、プログラムでは音楽に合わせた動きを厳格に指定するのではなく、参加者の年齢に応じて自由に動くことも許容していたため、音楽に合わせた思い思いの動きが生まれ、その中で結果的に音楽のもつリズムや曲調が参加者へ伝わったのではないかと推測できる。

５．学生の参加について

今回のプログラムにおいてボランティアとして本学幼児保育学科１年次生４名、２年次生５名（2 年次生は吹奏楽部所属）の参加があった。

事前打ち合わせを 3 回実施し（2019 年 11 月 28 日、12 月 5 日、12 月 12 日）以下の準備

を実施した。
・曲目の確認、当日の流れ、学生担当割り振り
・模造紙に「あわてんぼうのサンタクロース」の歌詞を書き、身体表現する部分を色分けする
・歌、動き、演奏の練習
・通しリハーサルにて全体の流れを確認
　また、コンサート当日に実施した活動は以下の通りである。
・コンサートの冒頭にオープニングとして「そりすべり」を吹奏楽の編成で演奏
　これから楽しいことが始まる、という期待感と楽しい雰囲気づくりをする
・「あわてんぼうのサンタクロース」では、模造紙に書いた歌詞をなぞりながら歌う
・各曲の動きを参加者に先立ち実践し、子どもたちの援助を行う

写真１　コンサート　オープニング

写真２　学生の様子

６．全体としての考察

今回企画したプログラムにおいて、参加者にはオープニング曲を除き、全ての演奏曲において、音楽を聴きながら動くことを求めた。その動きをスムーズに無理なく行うため、少しずつ身体をほぐしていく必要があると考え、プログラムの前半から後半にかけて、各演奏曲につけた動きを段階的に大きくしていくことを試みた。具体的には、前半のクリスマスソング２曲はその場で足踏みしたり、親子で向かい合って座るなど、移動しない動きに限定し、一方の後半では空間を走ったり、ステップを踏んで移動する、飛ぶ、といった動きを少しずつ加えていった。プログラム全体の流れの中でこのように進めたことにより、参加者は自然に身体がほぐれ、後半になるほど激しい動きも無理なくできたのではないかと考える。

加えて、参加者がスムーズに動くことができたのは、学生のフォローによるところも大きい。当日の様子より、参加した学生たちが各動きを、その１フレーズ前に先取りして参加者に示していたり、参加者の輪の中に入り、同じ動きを絶えず行ったりしていた。このことは参加者にとって変化していく動作が事前にわかり、結果動きの準備ができた上で次の動作に移ることができたため、スムーズに動くことの一助となったことが推測できる。

また、今回のプログラムタイトルにある「親子でふれあい」の意義について考察してみたい。親子間で相互に与える影響はどの分野でも大きいが、音楽に関しても例外ではない

と考える。具体例を挙げると、松本晴子（2011）[3]は「子どもが母親や父親と一緒に、初めて耳にするクラシック音楽を聴くとき、親の態度や反応に影響を受ける。親が楽しそうにあるいはうっとりとした様子で真剣に耳を傾け聴いている姿を間近に見たりすると、日常生活のなかで接している父母とは異なる姿に気付き、自分は聴いたことのない音楽でも次第に一緒になってその音楽に聴き入るようになっていく。」と記している。今回の取り組みにおいては、子どもにとって「くるみ割り人形」はおそらく馴染みの薄い楽曲であったにもかかわらず、親が音楽の中に感じたリズムや拍子を身体で表現し、楽しいと感じることで同じ感情が子どもにも伝わっているものと推測される。

更に、音楽に合わせて作った動きについて、子どもと親が常に一緒に一つの動きを作ることを意識した。その結果、共同することで音楽のリズム、テンポを親子間で体感することができたといえ、ここに親子でプログラムに参加する意義があると考えられる。特に「親子関係」という観点より、日頃から相互にコミュニケーションを密に取り合っている関係性から、音楽のもつリズムや曲調も伝わりやすいと言えるのではないだろうか。

7．今後に向けて

今回取り組んだコンサート形式として、参加者が演奏を聴く「鑑賞型」とは異なり、曲のリズムに合わせて広い空間を使って動き、音楽を演奏者と共に体感する「参加型」コンサートとしてその意義を概ね果たせたといえよう。

一方でこの形式のデメリットとして「静穏な環境で音楽に耳を傾ける」状況を作り出すことが困難であることが挙げられる。聴くことのみに集中すると、音楽の持つ多彩な音色の違いや繊細な曲間などを感じることが可能となるが、今回のコンサートでその状況を作り出せたのは、コンサートのオープニング曲のみであった。そのため、今後の取り組みとして、鑑賞に特化する曲を盛り込んだプログラムの実施も検討したい。その際、参加者が関心をもって聴くことのできるよう、その曲に関する情報提供が必須であると考える。更に本稿、序文に記す「視聴覚融合型」、いわゆる参加者の視覚にも訴えかける内容も検討し、参加者への効果を期待したい。そしてこの「参加者への効果」をより具体的に検証するために、参加者へ細かな聞き取り調査をしたり、アンケート調査項目において効果的であったと実感できる具体的内容を提示したりすることにより得られた回答を分析したいと考える。

更に、学生のコンサート参加について、今回のプログラムにおいて参加親子・学生・教員が一体となり、相互に影響を及ぼしながら作りあげられたコンサートであることが示唆されるため、その意義、また学生への効果についても今後検証していきたいと考える。

このように更なる取り組みにおいて、形式を多様化させるとともに、参加者・参加学生が相互に及ぼす効果や影響についてもより深く研究していく所存である。

付記

本研究は、2020年度大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部特別研究費「幼稚園教諭教職課程『領域に関する専門的事項』に関する研究」課題番号（10）より助成を受けている

研究成果の一部である。

謝辞
本論文の標題、概要の英語表記の校正に携わっていただいた能勢卓氏に心から御礼申し上げます。

注
[1)]みやざき 美栄・高橋 恵理，乳幼児期の音楽体験から考察する表現の発達：親子向けコンサートの反応とアンケート結果から，鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要．人文科学・社会科学編 第2号，2019, pp. 392-393
[2)]演奏の際、厳格な速度、リズムに微妙な変化をつけて精彩豊かにする方法
[3)]松本　晴子，就園前親子への音楽活動による支援の可能性－大学附属幼稚園の役割をふまえて－，宮城学院女子大学発達科学研究（11），2011, pp. 17-23

参考・引用文献
・浅香淳．新音楽辞典 楽語．音楽之友社，1977.
・福井真裕子・武田佳美.「音×アート×素敵なお話し－『アートベンチャー事業 2013』における試み－」京都聖母女学院短期大学研究紀要　第45集，2016, pp. 68-85.
・後藤丹 校訂・解説.「チャイコフスキーくるみ割人形」．全音楽譜出版社，1984.
・實野みどり・福井真裕子監修.「保育に役立つ　基礎から学ぶピアノ」．カワイ出版，pp. 94, 2019.
・松本　晴子.「就園前親子への音楽活動による支援の可能性－大学附属幼稚園の役割をふまえて－」，宮城学院女子大学発達科学研究（11），2011, pp. 17-23.
・みやざき 美栄・高橋 恵理,「乳幼児期の音楽体験から考察する表現の発達－親子向けコンサートの反応とアンケート結果から－」，鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要，人文科学・社会科学編 第2号，2019, pp. 391-404.
・民秋言 編集．幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立と編纂．萌文書林，2017.
・戸川　晃子.「クラシック音楽の生演奏が未就園児にあたえる影響についての一考察」，神戸常磐大学紀要 第6号，2013, pp. 35-47.

歌詞及び楽譜の転載に関する許諾
JASRAC（出）許諾 2008833-001
「チャイコフスキーくるみ割人形」は全音楽譜出版社より、楽譜掲載の許可を得ている